

『文部時報』一九五九年八月号（文部省編／帝国地方行政学会）

## 社会的・経済的な谷間の教育

— 貧困からの解放と古い教育観の打破を —

矢口 新

はしがき

社会的・経済的な谷間の教育という題を与えられた。この題の下にはカッコがついていて、勤労（青）少年・夜間中学・準要保護児童と書かれてある。勤労青少年の青にカッコがついているのは、少年に重きをおくということであるらしい。夜間中学というのはご承知のように、義務教育を終わらないで働いている青少年の学校である。準要保護児童というのはまだ耳新しいことばであるが、つまり困窮家庭の児童のことである。教育の見地から谷間というのは教育の手が行き届かないところをいうのであるが、それにはいろいろなる理由がある。勤労青少年や夜間中学の生徒、準保護児童などに対しては、教育の手のとどか

ない理由がまことに根深いところにある。つまり社会的・経済的というようなことばであらわさなければならぬようなところから問題が発生しているといつてよい。そこでその実態を明らかにしてそういう谷間の解消を考えようというのが編集者の意図であるらしい。

しかし一口に社会的・経済的な谷間といっても、その実態はきわめて複雑である。その根源はきわめて根深いところにある。社会的・経済的な谷間などという言い方やかたづけられるようなしろものではないといえよう。否そういう言い方はかえって本質を見失わせる場合すらあるのではないか。まず一つ何が谷間といわれるゆえんなのかを検討してみよう。

谷間の少年たち

勤労青少年というのはきわめて広い意味をもつことばである。このことばで特に少年というところに力を入れて考えれば、中学校卒業後、職業生活にはいった少年たちがまず頭に浮ぶであろう。もっとも勤労少年というのを字義どおり解すれば、中学校つまり義務教育を終わらないで働いている少年もこの中に入れて考えることができよう。更に少数ではあるが小学校の年令に当る者でも職業生活にはいつて教育の機会から遠ざかってい

る者もあるのである。これらをひとしく谷間の青少年と呼んでいいかもしれないが、一体何でそうなのかはそれぞれ相当に事情がちがうのである。小学校の教育もじゅうぶんに受けることができないう少年たちは、まことに谷間の少年と呼ぶにふさわしいかもしれない。それはしかしどんな事情から生れているのであろうか。一言にしていえば親の生活困窮である。こどもを学校に通わせるに足るだけの生活条件を所有していないということであろう。そのところが解決されなければ、教育の問題とはならないと一応いつてよい。といつて、国家がこれを教育の側から問題にしていけないわけではない。いわゆる生活扶助

長期欠席の理由

		本人によるもの			家庭によるもの		
		疾病異常	学校ざらい	その他	無理解	貧困	その他
小学校	男	56.3%	10.4	2.5	13.2	12.8	4.8
	女	53.7	5.7	2.2	15.4	17.1	5.9
中学校	男	24.0	22.0	3.6	18.0	26.5	5.9
	女	24.9	10.7	3.2	20.1	33.3	7.8

が約十万五千、中学校が十一万八千となっている。長期欠席というのは五十日以上欠席ということになってから、この中にはさまざまな理由の欠席者がいるのである。ちよつと重い病気なら五十日

以上休むことも考えられる。文部省の調査では理由別の調査もしている。それによると、本人によるものと家庭によるものとの二つに分け、更に本人によるものを疾病異常・学校ざらい・その他とし、家庭によるものを無理解・貧困・その他としている。この理由は一応こう分けられているが、それほど簡単に割り切れるものではないのである。疾病異常というのがいちばんはっきり分けられるけれども、本人が勉強ざらいというのは必ずしも本人にだけ責任があるかどうか、家庭の事情も影響することがあるかもしれない。家庭の無理解と貧困という区別も紙一重である。まずこの中で疾病は、谷間というのとはちがうから、それを除いてみると、小学校では約四万、中学校では約九万が、学校教育の網の目からもれている谷間の少年といつてよからう。この連中は大きく見て、社会的・経済的な理由から教育の手がのぼされていない少年たちといつてよいのである。事実この少年たちの中には生活扶助を受けている者、あるいは教科書費や給食費の補助を受けている者が、小学校で二万七千、中学校で三万ぐらいいるのである。しかもそれ以上に扶助を受けるに値する者が長期欠席者の中に含まれていることは数字をみれば明らかで

ある。中学校では貧困という理由の者だけでも実際に扶助を受けている者の数より上回っている。さてこのように見ると、社会的・経済的な谷間の少年が相当にいて、それらに対しては教育の手がのびていないということがよくわかる。教育の手をさしのべようとしていることは事実である。先に述べたように、生活扶助もあれば、教育扶助もあり、また更に準要保護児童というわけで教科書や給食の補助もしようとしている。だからさまざまな手は講じられているといつてもよい。その結果、これら谷間の少年の数もしだいに減少していることは事実である。昭和二十七年には、小学校で十六万近く、中学校で十八万もの長期欠席者がいたことを考えれば、この制度だけの力でないにしても、この制度もかなりの実効をあげたとはいえるであろう。しかしこの制度の考え方には前提がある。これは家庭が困窮しているために、学校にやりたくてもやれない、行きたくても行けないからこれを救済しようという考え方に立っている。つまり通学人の意欲が当人にあることを、また親にあることを前提としているのである。ここに問題がありまた限界がある。もちろんそういう者もあるけれども、問題は

や教育扶助の外に最近では準要保護児童という概念さえもできて、就学助成策として、教科書無償給与費の補助をし、学校給食費の補助も行っている。これは、生活困窮者の家庭のこどもが学校へ通うために必要なかかりの一部ではあるが社会的に負担し、したがって困窮家庭の負担をそれだけ軽減するに役立つというわけである。

文部省の調査によれば、昭和三十二年度の小・中学校における長期欠席者の数は小学校が約十万五千、中学校が十一万八千となっている。長期欠席というのは五十日以上欠席ということになってから、この中にはさまざまな理由の欠席者がいるのである。ちよつと重い病気なら五十日

そうでない者も多いということである。

われわれは困窮ということを持たず経済的な問題としてだけ見がちであるが、困窮の事実は実際にはそんな簡単なものではない。貧困は近代社会ではあらゆる悪の根源だといわれるが、少なくともさまざまな堕落と共在している。困窮家庭のほとんどが、無気力であり、怠惰であり、教育に不熱心である。そこが問題なのである。こういう状態は決して教科書を給与することや給食費を給与することによつては救えないのが普通である。もちろん救える者が全然いないのではない。しかしその程度で救える者は、そのようなことがなくとも救うことができる。だから、こう考えてくると、教育補助の問題として処理する前にもっと解決しておかなければならない問題である。別な言い方をすれば、貧困が原因で教育機会から遠ざかっていると考えるより、もう一つ根本的に教育に不熱心なほどだから貧困にもなるのだということにもなる。貧困というのは現実にはそういう事実なのである。

こういうように考えてくると、準要保護児童とか、要保護児童といわれる者に対して、つまり文字どおり谷間の少年に対して、教育の補助をするというようなことで問題が解

決するかどうかということになる。そういう

随落と貧困の環境の中に児童をおいて、ただ学校へ来させることさえ考えればよいというような考え方だけでよいかどうかということである。そういうことも学校へ来させる努力をするということだけが、本筋の考え方だろうか。もっと思い切った方式が考えられないものだろうか。という意味はたとえば、そういう児童を親の下から離して、よい環境を与えてやることといったことである。もちろんこれは考え方を問題にしているだけであるから、親の手をはなしたほうがよいということとをいっているのではない。たとえばの話である。今の日本では、親の下にいるのが子どもとしては最も幸福だという常識論がすぐ頭に浮ぶが、多くの貧困家庭では、子どもを離すほうが子どもにとってより幸福だという場合も多いのである。普通の家庭ではなるほど親と子がいっしょにいるほうが幸福かもしれない。しかしそれはすべてにあてはまるわけではない。谷間の少年には、そのぐらいのことをしなければ、教育するということが成り立たない場合も多いのである。教育を考える前にその土台のほうの問題なのである。にもかかわらず、土台もそのままにしておいて、ただ学校へ来るようにという程度のこと

しか考えてやれないでは、教育の貧困ということではないか。つまり教育を学校へ来るといふ形式だけで考えて、それではとうてい救えない人間をお座なりに扱っているだけにすぎないのである。

こういふふうには、ほんとうに、谷間の子ども側まで出て行って、救いの手をのばしてやるという親切心がなければ、谷間の子どもを救うことはできまい。そういう積極的な態度で考えなければならぬところに事態はきているといつてよいのである。つまり教育官僚の事務だけでは、谷間の少年は救えないのではないか。ただなにかの経費を負担してやるということが、こういった谷間の子どもに対する救いだという考え方には、おそろしく形式的な、お座なりの考え方があつたやうな気がする。こういう考え方は、ある意味で日本人のもつている教育の考え方における谷間である。そのほうがむしろ根本問題であろう。

最近中学校生徒の不良化の問題がやかましくなつてきている。その事情を調べてみると、多くが貧困の問題と結びついている。たとえば、教育扶助をして通学させている家庭の子どもが不良化して、学校生徒の間でボスとなり、更に学校の外のグレン隊と交わり、

手がつけれないなどというのがある。そして親は子どもがそういう事情を大して気にしていないというのである。これはその校区に密集部落をもっている学校の例であるが、その学校の教師は、その生徒が長期欠席をしてくれたほうが教師も助かり、他の生徒も助かるといっている。まことに奇妙な矛盾である。一方で長期欠席を克服しようとしているのに、その結果すくわれたかの如く見えた少年が、学校でつまはじきされて、長期欠席することを望まれているというのである。

不良化の問題は、こういったケースが非常に多いのである。つまり、社会的・経済的な谷間の少年に対する教育の手のさしのべ方が中途半ばなものなら、かえって害をなすこともあるのである。もう一度、現代社会での貧困はあらゆる悪の根源であるということ、を思い起してみよう。谷間の少年は貧困をもととして、そこからさまざまな墮落の世界につながり、しだいに反社会的な勢力として成長してゆきつつある。そういうものを育てる谷間が社会的に目につきつつある。谷間の教育はその点で重要な問題となりつつあるのである。

### 教育の谷間という問題

社会的・経済的な谷間の教育として、もう一つ勤労青少年のことが課題として与えられたが、これはいったいどう考えたらよいのであろうか。勤労青少年といえば、普通には中学校を卒業して職業の世界にはいつている者のことである。また高等学校を卒業して勤労している者もその中に入れて考えるようである。もし、こういう勤労青少年を谷間の青少年というのだとしたら、谷間の概念は少しおかしくなりはいないか。働くということとはそれ自身としてはりっぱなことであり、よいことである。だから勤労青少年は谷間の青少年だなどということではないのである。

しかし勤労青少年の中には、広くみれば義務教育を終らないで、昼間は働き、夜は夜間中学校へ通っている者もいる。こういう青年は確かに谷間の少年といえるのである。これらの青少年はいかにも痛々しい。しかしまた悲壮でもある。よくめげずにやっている。同じ年輩の者が昼間のうのうとして学校へ通っている間に、自分は働いて、夜勉強をしている。それはりっぱな少年たちである。前述した谷間の少年たちの中から、こういう少年が生まれ出てきているのであるが、これを思えば、谷間に対して根本的に教育の手をさ

しのべることの重要さをよりいっそう痛感するのである。そこが解決すれば、夜間中学校の問題などはおのずから解消するのである。しかしそういう少年が現在いるのであれば、夜間中学校もまたやむを得ないことであろう。現在は全国二千人余りがこの形で救われているけれども、もっと積極的にやればもう少し吸収できるであろう。望ましくないことであっても、昼間通学しようように対策が講じられないならやはりこの方法をとるようには考えなければならぬであろう。昼間通学させるだけの積極策等も講ぜずまた夜間中学は義務教育のたてまえから望ましくないとして否定しては、目をつぶってしまふことになるのである。ここにもまた官僚的・事務的ならざる施策等が望まれる。

しかし夜間中学校の生徒は普通には、勤労青少年の中へは入れて考えない。もっと別な方策によってこれを救済する対策だと考えた方がよいからである。さてそこで普通の勤労青少年であるが、これを谷間の教育の問題として考えるというのはどういうわけであろう。前述したごとく働くということばかりばなことであり、それが谷間に入ることであるというような考え方は許されなければならぬから、もう少し別な意味でなければなら

ない。その辺の実態を少しさぐってみよう。

まず最近において年々中学校を卒業する者は一九〇万ほどいるわけであるが、このうち五三%程度が上級学校へ進学する。その他の者がいわゆる就職者である。中学卒業して半数以上の者が高等学校へ進学するとすると、進学しない者は何か劣等感をおぼえるということになっているかもしれない。事実現在の中学校教育が進学教育一点ばりであって、職業生活にはいる者のための技術や人間教育に力を入れていないこともあるから、ある意味で、就職者は恵まれていない。ある中学校の卒業者は、中学校の先生にうらみをいだいてこそおれ、感謝する気になれないという。またある中学校では卒業当時は教師は就職したものから復しゅうされるのを恐れて、うかつに町を歩けないという。いずれも東京の中学校の話であるが、ここには日本の教育問題を如実にあらわしているものがある。小学校までの義務制であった時代はよかつたけれども、中学校までが義務教育となると、教育者も、その教育にはよほどの信念と自覚が必要であろう。将来職業生活にはいつてやってくるような教育をじゅうぶんにしてやる必要があるものであって、ただ進学教育のみに重点をおいて、就職者を邪魔者扱いに

するようなことであつては教育者の責を果したとはいえない。しかしそういう点になると、残念ながら今の中学校教育は、教育自体が谷間である。現に進学準備のつめこみ教育ならば最も容易で自信をもつて行うことのできる先生がいるけれども、産業の中へ入って職業生活をおくる者のために、人生教育や技術の教育を行うような教師は、残念ながら数えるほどしかいないのである。これは六・三制の中学校教育の根本問題である。否、ある意味では、日本の学校教育というものに対してもつている根本観念がそういう問題をもつているともいえよう。

さてそういう点からいえば、勤労青少年たちは、中学校時代から谷間におかれた少年であるともいえる。しかしこの谷間は、教育の谷間である。日本人の教育についての考え方が生み出した中学校教育の谷間の中に育つた青少年たちである。そして就職をする青年は比較的経済的にも恵まれない者が多いというところに、この問題の深い社会的、経済的な意味がある。しかし中心は、教育の谷間という問題であつて、教師の教育観や教育力の問題によつて、あるいは教育行政の力によつてこれを解決すべく考える問題である。ところで、これと同じ根から発生したもの

として、実際に就職して働いている青少年に対する教育の問題がある。働く青少年が教育的にみて、すべて不幸な境遇にあるとはいえない。たとえば、都市の大工場に就職し、その技術者養成所にはいつて六か年の教育を受けて、工業高校以上のりっぱな環境ですぐれた技術者として育てられている者もいる。一般に近代的な産業の組織の中へはいれば、多かれ少なかれ恵まれた生活と教育を享受して行く機会が多いといえよう。しかしこのことの裏が問題なのである。同じく勤労青年といつても、小企業体や家内工業、小商店へはいつたものたちは、一向に恵まれない生活をしている者も多いのである。日本は中小企業の国といわれるほど中小企業の多い国であるから、勤労青少年も多くその下にはいつている。かれらは前に述べたような意味では決して谷間の少年たちではない。前に述べたような少年は、近代社会の生み出した弊害としての経済的貧困の中の少年という意味での谷間の少年である。ここにいう勤労青少年はそうではない。りっぱに仕事をし、りっぱに生活している。経済的に豊かであるとはいえないが、それは日本人の生活レベルにある。広い意味では貧しい中にはいるうが、生活扶助を必要とするほど困窮しているわ

けではない。そういうものは質がちがうのである。

しかしかれらは別な意味で恵まれない谷間にいる。それは教育的な意味で谷間である。それもしかし学校へ行けないという意味でいう教育的ということではない。もっと広い意味で、あるいはより本質的な意味である。すなわちかれらを育てようとする環境がないことである。りっぱに育ててゆくものを、また自ら育てようとする意志をもちまた力も持っているかれらを、その周囲が育てようとしなないことである。

職業の世界にはいつてから人間の育ち方は事実を見てみると実にめざましいものである。学校で教えられている間は、いいかげんに考えやっていることも、職業の世界では真剣に行われるからであろう。だからもし職業生活にはいった数年間において、正しい教育が行われるなら、この間の伸びにはすばらしいものがある。その教育は決して学校のなものではない。あくまでも職業に密着したものである。しかし、だからといって教育でないとはいえない。考えようによっては、道徳も世界観も、みなそこで具体的に身につき完成されるといってよい。職業とともに身についたものは実行力も伴っている。つまり

実践的なものである。

ところが日本では、教育は学校のこととい考え方があつた。職場の先輩や親方がその後輩や徒弟たちを教育しようなどということは夢にも考えない。教育ということばが堅苦しいなら育てるといふことばを使つてもよい。若い者を育てようといふ考え方がないのである。育てるよりはつづそうと考へていゝといつてもさしつかえないのであろう。ここには、一般社会人のもつ教育観の問題や人間観の問題がある。そうして、それがこれらの勤労青少年を谷間の少年として位置づけていゝるのである。

都市の小商店や家内工業や小工場へ入つた少年たちは、その多くは農村からの出身者であるといつてよい。農村で育ち、農村で教育を受けた西も東もわからない十五、六才の少年がいきなり都会の中の商工業の生活に入り、そこで職業生活をする。数年間のその生活は、かれらを社会人として育てる最もたいせつなときであるにもかかわらず、その環境はきわめて悪い。十六時間の労働、単純、無味乾燥な労働、封建的人間関係、旧弊囚習の生活、そういったものの中に馬車馬的な数年を送らせられる。そうして、あげくのはては、そういう生活の場所からほうり出される

のである。それは相当の年令に達したものを、つまり一人前の者をかかえておく経済力がないからだといわれる。こうして経済的にもまた人間的にも、かれらを社会的人間として位置づけてやろうとする努力が周囲に見られない。封建の世の中の徒弟のほうがその点では、はるかに人間的に取り扱われていた。弟子としてめんどうをみてもらった。今はそういう仲間としてのつながりがなくなつて、しかもこき使つてゐる。こういう日本人の物の考へ方には、憤りを感じずにはおれない。怒ろしい谷間である。人間の心の谷間である。それが教育の谷間を生み出している。

「教育精神」といつたものが、よみがえつてこなくてはならないと思う。そして近代的な職場教育が起らなくてはならない。

(国立教育研究所)